

スピカ 原発占拠

高嶋哲夫

プロローグ

十二月九日、深夜。

富山県沖ニキ口。

落差三メートルの波から飛沫が躍り、風に飛ばされて空中に舞う。曇混じりのシベリアからの風は、急激に身体から体温を奪い去っていく。降り注ぐ雨と、風に吹き上げられる海水が混ざり合って、横殴りに吹きつける。空は荒れ狂う海面に届きそうな厚い雲に覆われ、暗黒の間を創造している。何も見えない。完全な闇だ。日本海は怒り狂う竜神を想像させた。

明かりを消した船が東に向かって進んでいく。全長七〇メートル、一二〇〇トン余りの、貨物船を改造した船だった。

船名は「ブルガ」。ロシア語で書かれている。錆の浮き出た船体に半分消えかかっているが、なんとか判読することができた。ロシアの東海岸にある、小さな漁村の名だ。

船は不気味なきしみを立てながら、波濤から一気に滑り落ちる。大きく揺れる波が甲板を洗う。その度に、防水シートで覆われた甲板の積み荷が不気味な音を立てた。

一人の老いた男が船首にたたずんで、荒れる海を見ている。濡れた白髪が額に張りつき、雫が目のにじむが、男はまばたき一つしない。握り締めたデッキのパイプが、手に張りついてしまいそうに冷たかった。

ナホトカの東五〇キロにある小さな港町ブルガを出て、四〇時間がすぎている。仲間の大半は船酔いのため、船内の粗末なベッドで呻いている。

男にも船酔いはあつたが、肉体の苦しみは時間が経てば慣れることを知った。しかし、精神の苦しみはそうはいかない。時が経つにつれ、ますます深くなるものもある。絶望の淵に身を追いやるものもある。男は何度か深い溜め息をついて、何も見えない船の後方に目をこらした。腕をまくつて時計を見る。もうすぐだ。旧式の自動巻腕時計は、風雨の中でも正確に時を刻み続けている。

船は横波を受け、大きく右に傾いた。彼はパイプを握っている腕に力をこめた。そしてもう一度闇に視線を向けると、背後のドアを開けて船室に戻っていった。

船室と呼ぶには、あまりに粗末な部屋だった。狭い通路の両側に、三段のベッドが五列並んでいる。薄暗い電球の光の中で、それは異様な光景だった。ベッドからは、ひっきりなしに低い呻き声が聞こえる。すえた臭いが漂い、濁った重い空気が淀んでいる。時折、生気をなくし

た白っぽい顔が通路にのぞいた。吐く音が聞こえたが、胃の中のものを出し尽くしている。すでに胃液も出ない。

「大丈夫ですか、博士」

ベッドを見まわっていた東洋人が男に声をかけた。

「私は大丈夫だ。しかし兵士でない者には酷な航海だ」

そう言うと、男は奥のベッドに行き横になった。東洋人はしばらく男を見ていたが、階段を上っていった。

船艙を隔てて、もう一つ部屋がある。そこはさらに薄暗く、粗末な部屋だった。裸電球が数メートルおきに三つ、その光がうねりに合わせて揺れている。結香はささくれ立ち、砂と泥でざらついていた。隣の部屋とは対照的に、凍りつくような緊張感が漂っている。

狭い空間に四〇名余りの男たちが膝を立て、その間に顔をうずめて座っている。油染みたズボンにジャンパー。ほころびを繕った上着、コート……。一見、ロシアの下級船員や漁民のように見える。全員が陽に焼けた、体格のいい男だった。大半が眠っているのか、身動きひとつしない。冬眠中の熊のようにも見えた。かすかないびきも聞こえる。眠りながらも、規律と訓練のいきとどいた張りつめた空気があった。

古びた漁船の操舵室に、場違いな機器が並んでいる。最新式のレーダー装置、衛星回線が利用できる通信機器、衛星を利用した位置確認装置、そして暗視装置。闇の中にレーダースコープの画面が青白い光を発して、男たちをぼんやりと照らし出している。その狭い空間に、操舵手と航海士の他に二人の男がいた。一人は帽子を被った髭面の船長。背は高くないがガツチリした体格で、白髪混じりの髭をはやしていた。もう一人は角ばった顔に銀髪、鋭い目、四〇過ぎの精悍な顔つきをした白人である。身長は一八〇センチ前後。贅肉のない引き締まった身体をしている。

ドアが開き、ずぶぬれの男が入ってきた。東洋人だった。頭髪を短く刈り込み、極端に痩せている。削げた頬に、陽に焼けた肌。黒のタートルネックの上に、厚手の皮ジャンパー。どこかに子供のような雰囲気を残し、二〇代の青年のようにも見える。

「異状ないか」

銀髪の男が聞いた。ロシア語だった。

「みんな疲れてはいるようですが、大丈夫です」

東洋人は答えて、男の横に立った。

三人は黙って船の進行方向を見つめていた。レーダーが描き出す輝線は、陸地が近いことを表していた。しかし、前方に広がっているのは闇だけだ。操舵手は風と波と潮流に逆らい、懸命に舵を取り、船の位置を確認しようとしていた。

「海岸まで五〇〇メートルです」

レーダースコープを見つめていた男が言った。

「どうしましょう。この天候です」

船長が横の銀髪の男に視線を向けた。

「かえって好都合だ。発見されることはあるまい」

銀髪の男は低い声で答えた。会話はすべてロシア語だ。

「この嵐の中を陸まで運搬することには、私は責任が持てません」

「中止はできない」

東洋人は双眼鏡を目に当てたまま言う。

「あと二〇〇メートルが限度です。それ以上は岩礁が多くて近づけません」

「分かっている。きみの役割はここまでだ」

銀髪の男は船長のほうを向き、肩を叩いた。時計を見た。午前二時。予定通りだ。

かすかな明かりが見えた。赤い光源が正三角形に並んでいる。三人は顔を見合わせて頷いた。

「全員、一〇分以内に甲板に整列」

船長がマイクに向かって怒鳴った。

船室で膝に顔を埋めていた男たちが顔を上げる。四〇人の男たちは、いっせいに立ち上がった。

た。全員、腰に拳銃の入ったホルスターと大型のコマンドナイフをつけている。部屋の中に三列に並び、踵を鳴らした。

一人のずんぐりした男が一步進み出て、早口で命令した。男たちは一列になって、狭い階段を駆け上がる。船は重力を無視したかのように、ゆったりと上下に揺れ続けている。波と風と潮の流れ、船のエンジンと舵を微妙に操作した、見事な操舵だった。

男たちは甲板に整列した。小さな明かりがつけられ、男たちの雨と潮に濡れた顔が浮かび上がった。

操舵室にいた銀髪の男が彼らの前に立った。

「三〇分で作業を終了しろ」

短い言葉で命令する。

彼らは揺れ動く船の上で、迅速に作業を開始した。甲板からネットが降ろされる。一二人乗りの大型ボートが、甲板いっぱいに並べられた。一八馬力の船外エンジンを取りつけ、次々にそれを海中に投げこむ。ネットをつたって降りた男が、ボートを舷側に集める。

作業はすべて無言で行われた。一〇分足らずの間に、一七艘のエンジン付きの大型ゴムボートが、船のまわりに浮かんだ。

甲板の積み荷の防水シートを剥いでいく。中から、さまざまな大きさの木箱が現れる。船艙からも木箱が運びあげられ、甲板には百近い木箱が積まれた。二人がかりで持ち上げ、慎重に

船縁まで運ぶ。

甲板には、ウインチがセットされた。彼らは船員たちの手を借りて、木箱を海上のゴムボートに積み込む。

船が傾いた。小柄な男が足を滑らせてデッキに叩きつけられ、そのまま船縁に滑っていく。甲板から姿が消えた。その瞬間、横にいた東洋人が身体を海に乗り出して、腕をつかんだ。船縁にぶら下がった男の帽子が風に飛ばされ、短く刈り上げられた金髪がちぎれるように風になびいた。白い肌が引きつっている。唇が血の気を失って震えている。女だ。東洋人は渾身の力をこめて、甲板に引き上げた。女と目があつた。大きく見開かれた目の中に、恐怖が凍りついている。

女は甲板に両手をついて、激しく咳きこんだ。東洋人は背中を軽く叩いた。女はしばらく咳きこんだ後、静かになつた。

「いそげ！」

怒鳴り声が聞こえた。東洋人は立ち上がった。女はちらりと東洋人を見て、作業に戻つた。東洋人は振り返って、しばらくその後ろ姿を見ていた。

二〇分あまりで、木箱のすべてを積み終えた。

船室から一二名の男が出てきた。ベッドでうずくまっていた男たちだ。甲板で働いている者たちと比べると、全員ひとまわり小柄だ。長旅と船酔いで疲れ切っていた。甲板の男たちは彼

らを支えてゴムボートに誘導した。

一二名の男たちがボートに乗り移ると、指揮をとっている髭面が、白髪の男に報告した。デッキで海を見ていた男だ。男は頷いて、手摺りに手をかけた。一瞬動作を止め、振り返って北の間を見つめた。遙か彼方を懐かしむような優しい目だった。男はネットを降りていった。

甲板で働いていた男たちは、最後に円筒形の大型バツグを船室から運び上げた。彼らはバツグを担いで、ネットを降り始めた。

大きな横波が船腹を襲った。船が大きく傾く。男が一人ロープに足を払われ、暗い海中に消えた。船員がライトを点け、海面を照らした。船長と一緒にいた銀髪の男が、ライトを叩き落とす。ライトは海に落ち、すぐにその光を失った。

「終了しました」

命令を出していた髭面が、銀髪の男の前に来て言った。

【続きは書籍・文庫にてお楽しみ下さい】

注意

本作品の全部、または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡すると著作権法、その他関連法によって処罰されます。